

夕顔の巻の「結び」とその展開

岩 瀬 法 雲

(一)
帯木・空蝉・夕顔の三帖はひとまとまりのものとして作者自身も考
えていたらしく、これだけに序と結びがついていることでも察しられ
る。殊にその結びの末尾「つみさりとところなく」が、校異源氏物語に
よると、

昔表紙本系七本の中一本に、

つみもさりとところなくとほんには、ことおほかりとなん(御物本)

河内本系は、五本中全部が、

つみや又さり所なくとほんには、ことおほかりとなん

別本一本、それが、

つみまたさり所なくことおほかりとそ本には、(陽明家本)

作者にもと区画意識のあつた証拠で、五十四帖中巻末にこの「本に
は」のあるのは、此所と最後の夢浮橋とだけである。

作者は何故この三帖を特別のものとして序と結びとを付けたのか。
このことは、この作者の作家としての成長を知る上に、一つの手懸り
となると思う。即ち、そこには物語作家としての態度が反省されてい
るからである。結びのことは、

(A) かやうのくだくだしき事は、あながちに随ろへ忍び給ひしもいと
はしくて、みな漸らしとどめたるを、(反写実的)
(B) など帝の御子ならむからに、見む人さくかたはならず、もの誉め
がちなる、(伝奇的)

(C) と、つくりごとめきてとりなす人のし給ひければなむ。(反省)
(D) あまりものいひさがなき(写実的)
罪、さりどころなく。

つまり、反写実的な、即ち古物語のような伝奇作家的な態度を反省
して、写実作家に転向した宣言を、自己弁護の形にしたものである。

A' 光源氏、名のみことごとしう、いひけたれ給ふとが多かくなるに、

いとど、かかろすきことどもを末の世にも聞き伝へて、かろびたる
名をや流さむと、忍び給ひけるかろへごとをさへ、

D' 語りつたへけむ人の物いひさがなきよ。

さるは、いといたく世をはばかり、まめだち給ひける程に、なよび
かにかしき事はなくて、交野の少将には笑はれ給ひけむかし。

(序)

結びはこの序と呼応している。先の(A)の部分はA'と、(B)はB'と。それは、既に湖月抄師説が指示している。結びが転向の宣言なら序はその抱負である。

さて、作者の転向の動機となった批評者の言(実は作者の反省)、
「つくりごとめきて」は、今までに発表された巻々を讀んでの所感であつたに違いない。一余りにも源氏を欠点なきものとして誉め過ぎつたというのである。それはどんな巻々であつたか。

桐壺の巻に、「いとどこの世の物ならず、清らにおよすけ給へれば、いとゆゆしう」とか、「世に類なしと見奉り給ひ、名高うおはする宮の御かたちにも、なほにははしきはたとへん方なくうつくしげなるを」とか、それである。これは巻の順序からして当然であるが、夕顔の巻以後にも屢々見えるのである。

若紫

源氏の君……岩に寄り居給へる、類なくゆゆしき御有様になぞ、何事にも目移るまじかりける。……いふかひなき法師童女も、涙をおとし合へり。ましてうちには、年老いたる尼君達など、またさらにかかる人の御有様を見ざりつれば、この世のものとも覚え給はず、と聞え合へり。僧都も、「あはれ、何の契りにて、かかる御様ながら、いとむつかしき日本の末の世に、生れ給ひつらむ、と、見るにいとなむ悲しき」とて、目おしのごひ給ふ。

天上の者がまちがって下界に降りた程の美貌だといふのである。

紅葉賀

入りがたの日影さやかにさしたるに、楽の声まさり、物の面白き程に、同じ足踏おももち、世に見えぬ様なり。詠などし給へるは、こ

れや仏の御迦陵頻伽の声ならむと聞ゆ。

源氏の舞や歌声が、極楽思いやられる美しさだといふのである。

花宴

ふみなど講するにも、源氏の君の御をば、講師もえよみやらす、句ごとに誦じのしる。博士どもの心にもいみじう思へる。

源氏の作詩に対する讚美である。

同

わななくわななく、「ここに人の」と宣へど、「まろは、皆人にゆるされたれば、召し寄せたりとも、なでふことかあらむ。たゞ忍びてこそ」と宣ふ声に、この君なりけり、と聞き定めて、いささか戀めけり。

女を犯す時にも源氏は特権者である。それを彼自身の口から高言させると、女も受け入れる。

葵

あやしの者どもの、手をつくりて、額にあてつつ見奉りあげたるも、をこがまし。

斎院御輿の日、供奉として行列の中にある源氏に対する群衆の礼讃ぶりである。感激のあまり合掌している。

須磨

こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れ給へる御さまにて、「釈迦牟尼仏弟子」と名のりて、ゆるるかによみ給へる、また世に知らず聞ゆ。……涙のこぼるるをかき私ひ給へる御手つき、黒木の御数珠に映え給へるは、故里の女恋しき人々の心、ななぐさみにけ

り。
配所では配所で、源氏はまた美しく、従者たちに対しても魅力的である。

明石

「夢に……かねて示すことの侍りしかば、こころみに船の装ひを設けて待ち侍りに、いかめしき雨風、雷のおどろかし侍りつれば、……このいましめの日を過ぎず、このよしを告げ申し侍らむ、とて船出だし侍りつるに、あやしき風細う吹きて、この浦に著き侍ると、まことに神のしるべ違はずなむ。」

源氏を迎えに来た入道のことばである。どんな危急の時にも源氏には神助がある。一体、こうした源氏讚美はどの巻まで続くのか、これが続いている間は帯木並び三帖は書かれていなかっただけである。

絵合

かかるいみじき物の上手（源氏）の、心の限り思ひすまして静かにかき給へるは、たとふべき方なし。親王（判者）より始め奉りて、涙とどめ給はず。……さまざまの御絵の興、これに替移りはてて、あはれに面白し。よろづ皆おしゆつりて、左勝つになりぬ。

冷泉院の御前の絵合せは豪華を極めた。源氏の手になる須磨謫居の日記絵は称讃の的となり、圧倒的な勝利をおさめる。こういう調子でどの巻まで続くにしろ、結局、源氏讚美のために物語のすべての筋は仕組まれ、運ばれるに過ぎない。「など帝の御子ならむからに」は、こうした時の、作者自身の中へ起った反省であったのである。古物語の主人公は、かぐや姫や俊隆のように、作者からは必ず讚美されるものに決まっている。この作者もその伝統に従って出発したのである。

ところで、同じような讚美を繰り返しているに堪えられなくなって来た。即ち、写実精神の目覚めである。そこで、今までを一応所謂源氏本伝としておいて、外伝として、新しく帯木並び三帖を書き、その趣旨説明に、序と結びとを添えたに違いない。すると、序の「交野の少将には笑はれ給ひけむかし」は古物語への訣別を意味することになる。

(一)

帯木並び三帖が、源氏讚美が行き詰まって、後から書き添えられたものであることは、序がすむと、

「まだ中將などにもし給ひし時は」で始まる「まだ」の語が証拠になる。この語の用例は同じ帯木の巻に、

「はやう、まだいと下廊に侍りし時、あはれと思ふ人侍りき。」
現在、左馬頭である者が、過去の体験を語るに当って使われている。

「まだ文章の生に侍りし時、かしこき女の例をなむ見給へし。」

これも同じ場合で、現在は式部承である。ところで、源氏の場合、その回想の基点になる時の官位は何であったか。

「まだ中將」云々については、細流抄も既に触れている。

「ここより双紙の詞なり。今源氏は当官中將なり。給ひし、此し文字は、過去のし文字にて聊心得がたきやうなれども」

この物語の巻々の順序が現在の上である以上、この疑いは当然である。

源氏が中将であったことを示す巻は、夕顔の後では、若紫、紅葉賀、花宴であり、大將は、葵、賢木、花散里、須磨であり、権大納言は、明石、内大臣は、澄源、絵合、松風、薄雲、朝顔、太政大臣は、少女及びそれ以後の巻々である。(尤も、蓬生・関屋の二巻は、順序は深標の次でも、官位は蓬生では、大將・権大納言であるから、帚木並び三帖のように、後から書かれたことが想像される。一体、その基点はどこなのか。

「また中将などにもし給ひし時は」

この「など」が注目される。幸い、ここは、諸本一致しているの
で、大將及びそれ以上の官位の時であったに違いない。しかし、少くとも大將の時ではない。現在中将である人の少將であった時のことを回想して、夕顔の巻に、

「頭の中將、まだ少將に物し給ひし時」

とあって、「少將など」とは無い。「など」は、「正シク其物ニ限ラズ、外ニモ尚アル意ヲイフ」と言海にもあるから、回想の基点になつてゐる時の官位は、大將も過ぎて、権大納言か、内大臣か、あるいは太政大臣であつたかもしれないことになる。仮に、蓬生・関屋が帚木並び三帖と回想の基点の時が同じなら、そこでは、大將・権大納言の時まで溯つてゐるので、内大臣及びそれ以上の官位の時であつたということになる。現在、左馬頭や式部丞が、それぞれ「下廊」や「文章生」であつた時との間には、相当の開きがあるように。一方、超人としての源氏讚美がどの巻まで続いているか、このことともならみ合わせれば、その基点の時は想定できることになる。今それに触れ

ることは出来ないが、少くとも、上記引用文によつて、綜合の巻も過ぎてからであるということだけは言える。

(三)

主人公を超人的な者に造型する古物語の伝統的な手法を、この物語の作者は活かせるだけ活かして、そこから転向した。この自己批判の消息を物語るものに帚木の巻の枝芸論がある。

(四)人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海のいかれる魚のすがた、から国のはげしきけだものかたち、目に見えぬ鬼の顔などの、おどろおどろしく、作りたるものは、心にまかせて、ひときは人の目をおどろかし、じちには似ざらめど、さてありぬべし。

(五)世の常の山のたたまひ、水の流、目に近き人の家居有様、げにと見え、なつかしくやわらびたるかたなどを、静かにかきまぜて、すくよかならぬ山の景色、木深く、世離れてたみなし、気近きまがきのうちをば、その心しらひおきてなどをなむ、上手はいと勢、ことに、わるものは及ばぬ所おほかめる。

Dは伝奇的なもの、Eは写実的なものである。画家の優劣は写実的なものを描かせることによつて始めて判定がつくと言ひ、それは工芸家も書家も同じだと、同じ論法でその前後に述べているのである。伝奇的なものを抑え、写実的なものを挙げる例としては、くどいまでに並べ立てる所に、当時の作者の主張が現われる。ところで、これと同

じことが、螢の巻の物語論にも見える。

(H)さてこのいつはりどもの中に、げに、さもあらむとあはれを見せ、つきつきしう続けたる、はた、はかなしごとと知りながら、いたづらに心動き、らうたげなる姫君の物思へる見るに、かた心つくかし。

(G)またいとあるまじきことかなと見る見る、おどろおどろしく、とりなしけるが、目おどろきて、静かにまた聞く度ぞにけれど、ふとをかしき節、あらはなるなどもあるべし。

Fは写実的であり、Gは伝奇的である。傍点のことばは、D、G、E、Fにそれぞれ共通に見えるものである。もとより、物語の世界は仮構されたものであるが、同じ仮構でも、Gの方は二度と聞けないと言うのに対して、Dの方は、つまらないと知りながらつらい心が引かれてしまふと言ふ。

この螢の巻と葎木の巻とは、こうして同じ基盤に立ちながら、螢の巻の方は、後でも述べるように、更にそれから進展するのである。

四

主人公を写実的に描こうとすると、主人公を作者の手の届く生活圏内へ引きおろして来る必要がある。そして主人公の相手をせざる女性

も、作者の属する中の品から選ばなければならぬ。空蝉や夕顔はそうした女性であった。葎木の巻の女性評論はまたそれを物語るものである。

人の品高く生れぬれば、人にもてかしづかれて、隠るること多く、自然にそのけはひこよなるべし。中の品になむ、おのかじし立てたる趣も見えて、わかるべき事方々多かるべき。下のきざみといふ際になれば、殊に耳たはずかし。

女の特徴が生き生きと個性的に捕えられるのは、中の品の女に限るという。(空想で描いた藤壺や六条御息所や葵上とは違う。)そうした圈内へ主人公を引きおろして来るのだから、源氏も普通人になつてしまふ。空蝉が意のままにならないところから、「伊予の介(空蝉の老夫)に劣りける身こそ」と小君(女の弟)に愚痴をこぼしたり、「あこは、……つらきゆかりにこそ、え思ひはつまじけれ」といやみを言ったり、夕顔の死骸を隠した寺からの婦り、馬にも乗れそうもなく、ずるずるすべり降りて、「さらに、え行きつくまじき心地なむする」と、惟光をてこずらせる源氏、以前の譏突されるためにあつた源氏とはおよそ違う。作者のそうした写実精神への自覚は、作者にとつては大きな人間発見であつたに違いない。

夕顔の宿は五条の陋巷にある。壁一重で隣家に連なる。

隣の家々、あやしき賤の男の声々、目さまして、「あはれ、いと寒しや。今年こそなりはひも頼む所少く、田舎の通ひも思ひかけぬ

ば、いと心細けれ。北殿こそ、聞き給ふや。など言ひ交すも聞ゆ。いとあはれなるおのがじしの営みに、起き出でてこそめき騒ぐも程なきを……

主人公讚美の巻々では夢にも見られなかった人間の世界である。

宮仕え以前の作者は、未亡人生活のつれづれから物語に熱中し、同好者と文通し、少し疎遠なのはこちらからわざわざ手紙を書きもした。日記に「つれづれをばなぐさめつつ、世にあるべき人かずとは思はずながら、さしあたりて、はづかし、いみじと思ひしるかたばかりのがれたりしを」と、書いていくくらいである。所が、宮仕えに出てからは、心境が変わり、「こころみに物語をととり見れども、見しやうにもおぼえずあさましく」と、もはや感興の湧かないことを言っている。この変化は、宮仕え後の作者に写実精神の自覚が起こったことを物語る。

(4)

さて、螢の巻の進展というのは、

御よきさまに言ふとは、よきことの限りをえの出で、

(1)人に従はむとは、またあしきさまのめづらしきことを取り集めたる、

(2)皆かたがたにつけたる、この世の外の事ならずかし。(螢)

これは勿論直接には古物語についての言であるが、作者自身の源氏

物語について言えば、Hは伝奇的で、源氏讚美の巻々を意味し、Iは写実的で、源氏の秘密を暴露した巻々に当る。従って「人に従はむとは」は、「など帝の御子ならむからに」(結び)の非難に応じたものということになる。H-Iはともに仮構の世界ではあるが、更に高次の立場から見れば、結局現実の人間生活とは無関係のものではないという、それがJである。これはあの序や結びに見られなかった新しい発言である。作者は今それを言える立場に立っているのである。ところが、湖月抄師説には、「是も源氏紫上などの事は、殊の外にはめなし、末摘花近江君などの事は、をかしくあしきやうに書きしを、下に持ちて云ふ也」とある。あの序と結びの意義を十分追究しなかったために、「よき」も「あしき」もが、共に同じ主人公の両面であることに気がつかなかったのである。

仏の、いとうるはしき心にて説き置き給へる御法も、方便といふことありて、さとりなきものは、ここかしこ違ふ疑を置きつつくなくむ、方等經の中に多かれど、言ひもて行けば、ひとつ旨にあたりて、菩提と煩惱のへだたりなむ、この人のよきあしきばかりの事は変りける(螢)

同一主人公をあるいは讚美し、あるいはその非を暴露して、彼此一致しないようであるが、結局、同じ主人公の善悪両面に過ぎないと言うのである。作者は先に、物語が伝奇的であるよりも写実的でなければと言ふ反省から、帯木並び三帖を書いたのであったが、その反省の強きは、三帖の後に末摘花の巻まで書き足した程である。善悪を分離

させることは、仏教の所謂方便と同じで、真実は、物語制作においても、分難してはならないことを知ったのである。

作者の信奉していた天台教学では、法華經のみが真実で、爾前の諸經、華嚴・阿含・方等・般若みな方便だと言う。しかし、方便だからとて捨てるべきではない。法華經に、

「もろもろの言説する所は、みな実にしてむなしからず」(如来寿量品)

とある。それを作者は、「言ひもて行けば、ひとつ旨にあたりて」と言うのである。これは作者の大きな進展である。制作におけるこの態度の変化は、制作内容の世界の変化でもある。主人公を始め諸人物に対する扱い方が変わって来なければならぬ。

以上、作者は、源氏物語制作の途中、伝奇を抑えて写実を挙げ、更に伝奇・写実ともに方便であり、真実は別になければならぬことを、作家的体験としてつかんだのである。作者は今前人未踏の境地に入った。所で、一体その真実とはどんな境涯なのか、作者の日記によれば、

「世のいとはしきことは、すべてつゆばり心もとまらずなりにてはべれば、ひじりにならんに懈怠すべうもあらず」

やうやく作者は頂上にたどり着いたのである。その作者が、目的の出家は実行しないのである。理由として、

「ただひたみにそむきても、雲にのぼらぬほどのため、たふべきやうなんはべるべかんなる。それにや、すらひはべるなり」

出家より在家—あるがままの人間生活に心が引かれそうだというの

である。「ひじりにならんに懈怠すべうもあらず」という作者がいうのである。ただの者がいうのとは違う。頂上から下りて再び人里にもどった修行者と同じである。「煩惱の林に遊んで」という境地に近い。それが作者の「たゆたふ」であり、「やすらひ」である。これは所謂往相に対する還相の境地である。善は善のまま、悪は悪のまま、二つをそのままに抱き取る、おおらかな、広い、深い人間理解の世界である。だから、

「心ふかき人まねのやうにはべれど、今はただ、かかると、ことをぞ思ひ給ふる」

傍点の所は、「たゆたふべき」ことの内容である。作者は日記のそういう世界を、今、物語に創造しようとするのである。それは、古物語には勿論、この作者にも今までになかった、全く新しい世界である。

さてかかるふるごとの中に、まろがやうに**a**実法なる、しれもの物語はありや。いみじう氣遠き、もの姫君も、御心のやうにつれなく、そらおほめきたるは世に**b**あらしな。いざ類なき物語にして、世に伝へさせむ(登)

登の巻の物語論の最後のことばである。

aは善悪一如の物語を暗示し、bはその制作を意味する。結果はともかく、源氏と玉鬘との交渉を物語る巻々は、そうした抱負をもって書かれたに違いない。それが真に実現を見るに到るのは、若菜の巻以後、所謂この物語の第二部、第三部ということになるのだけれども。

池田亀鑑博士は、朝日の古典全書源氏物語の解説の中で、螢の巻の物語論をとりあげ、紫式部は、自らの主張として古物語に伝奇・写実二種類のあること、そうして、後者をより本質的なものとし、更にそれらを超克して、「かくあるといふ現実生活をふまへてその上にかくあるべしといふ世界、いはば永遠の世界を幻想したものであった」とされ、「源氏物語に現はれる人物は、現実そのままの人物でなく、物語化された一実は理想化された人物であり、写実を越えた象徴の世界のものであった」と述べられている。所で、その象徴化ということを、「よしとあしとの対立や偏向の著しい現実界の誇張化」がそれであるとされ、「藤壺や紫上には美化が行はれ、弘徽殿女御や源典侍や近江君や末摘花には醜化が行はれて、より多くの誇張化、觀念化がなされ、理想主義的な精神を現はしてゐる」と、湖月抄以来の伝統的な解釈を踏襲されているのであるが、あの物語が写実主義を越えて理想主義の立場に立つことは、言うまでもないが、作者の意味する理想主義とは果して善悪対立の誇張化であつたらうか。

ただかくぞとりどりに比べ苦しがるべき。このさまさまのよき限りをとり具し、難ずべきくきはひませぬ人は、いづこにかはあらむ。吉祥天女を思いかけむとすれば、法氣づき、くすしからむこそ、またわびしかりぬべけれ。(帚木)

女はそれぞれに一長一短で、美点ばかりをとり揃えた女は、この

世にはない。あれば人間ばなれのした、窮屈なものだと否定しているのである。その作者が、再び「よきことの限りをえり出で」て、人物を造型することを、物語制作の真実とするであらうか。帚木の巻のことは、既に作者には超人否定を意味するはずであつた。また博士の説では、源氏物語の作者は、出苑から二種の古物語を超克しているようであるが、帚木の序や夕顔の結びを見れば、そうでなく、螢巻によれば、完全に超克したのは、その巻のあたりからのようである。

作者の理想主義は、善悪対立の觀念化とは逆に、善悪一如の具体化にあつたのではないか。

(一九五九・五・三一)